

超右翼・櫻井よしこ氏の時代錯誤の弁(講演会で)。
「十七条憲法の精神を引き継ぐとされる元号、令和の時代の課題は聖徳太子が脱中華と大和の国造りを目

指したように、日本の国柄を誇りをもって定着させると、それは憲法改正です。」
応援団の後押しで改憲へ走る安倍日本会議政権。奇妙な事件が頻発するが、これらみな同根の腐れ。団塊世代を犠牲にして今や哀れ世界30位。

腐った同根の根を断て!

神戸新聞NEXT
老人ホームで90代男性が孤独死 施設側2週間気付かず 兵庫・明石
24時間スタッフが常駐する兵庫県明石市の介護付き有料老人ホームで、入居者の90代男性が居室で「孤独死」していたことが



Myニュース
日本経済新聞
日本の競争力は世界30位、97年以降で最低 IMD調べ
2019年5月29日 4:11

今月秀句

和の上に銃をかまえた令の影
村度がいつか生み出すヒットラー

遠田亀公子
自真弓

この2つの句、セットで今の日本を象徴的に表している。令和で浮かれる世相がファシズム誕生前夜を暗示する。安倍日本会議政権は改憲へひた走る。(周)

例会案内

6月例会 6月27日(木)
投稿締切 23日(日)
課題「石」 3句以内
自由吟 5句以内
自選句、自解筆もぜひよろしく。

◆目次

川柳互選	2
課題吟「和」	3
自由吟	4
自選句	5
おたより	6
ほのぼの川柳	7
連作/北海道への旅	8
プロレタリア文学の盲点⑦	9
反戦詩人・楨村浩	10
シベリア抑留の記録⑧	11
故・秋山茂氏の手記	12
編集後記を兼ねて	13
	16

5月の 川柳互選

◆課題吟「和」

(互選) 一人3句以内吐

2	和合して年金減らされ安倍ノーだ	和子	2	声高に和正論までも退ける	ダン吉
2	習近平温和な顔して怒り口調	徹乗	3	和食材すべて輸入で調達す	白眞弓
2	政権は 和戦のかまえ 法を無視	広助	3	権力の思いのままの「尊い和」	林
1	和川柳野党共闘賛成し	一角	3	ナシヨナリズムが平和の道を邪魔してる	徹乗 ²
1	野党間和して同ぜず一致して	一角	3	九条は 平和の証 令和でも	広助
1	令和の平和の和ならよかつたな	一角	3	君臣の令和で無に帰す民主主義	林
1	民和合基地要らぬ想いふくらませ	和子	3	国境をまたぐ平和が試される	亀公子
1	アメリカファースト叫び世界の和を乱し	徹乗	3	戦後平成 令和の今も 米のポチ	宏
1	令和にぶらぶら下る戦さの手	大峰	3	胸騒ぎ世界中が和を忘れ	未知子
1	一吐の心知れば知るほど背筋伸び	未知子	4	強い人和の大切さ説いてはる	ダン吉
2	和の裏に染みついてはる血糊あり	立東爺	5	だんだんと平和と逆の道走る	和子
2	安倍不評吉本使つて緩和する	白眞弓	5	和が軋む太平洋からトランプ砲	立東爺
2	昭和とて 歴史反省 腰くだけ	宏	5	国民に政府の令を唱和さす	林

- 5 尻尾振る平和に馴れて蟻地獄
 亀公子
- 6 圧力で求める和には腐敗臭
 白眞弓
- 7 和の上に銃をかまえた令の影
 亀公子

◆自由吟 (互選)

一人5句以内吐

- 男女同権安藤昌益江戸の世で
 未知子
- アベ劇場いづれ劣らぬ粒揃い
 亀公子
- 正論も 数の力に 押し切られ
 広助
- みちのくで人影見えず田に草木
 未知子
- 年金を奪われぬよう結束を
 和子
- 安倍憎し通帳見ては裁判を
 和子
- 「この俺が事実」と言う驕りかな
 林
- もう要らぬ首相はあべ掃き清め
 和子
- 日本は世界でも貧しい国になりました
 立東爺
- 「風通し」死者の無念がほとばしる
 ダン吉
- 働きかた改メロン滞納家出され
 徹乗
- 何ですかゲンパツつてと学生が
 一角

- 1 安倍総理憲法までもけがすのか
 和子
- 1 トランプに悪の枢軸見えてき
 和子
- 1 偽物の三種の神器並び立て
 大峰
- 2 笑いなさいいつも鏡に言われてる
 ダン吉
- 2 良心の自由を縛る安倍邪心
 林
- 2 新元号神に成つてキナクサイ
 大峰
- 2 Jアラート鳴らせぬ北の飛翔体
 白眞弓
- 2 蝦夷地にも耕作放棄地痛ましい
 未知子
- 2 洗脳が溶けないまゝの天皇デー
 大峰
- 2 経済論庶民の財布は計算外
 立東爺 3
- 2 平成は戦の準備しこたまに
 ダン吉
- 2 天皇も女性活躍カヤの外
 一角
- 2 政治家 財に群がる 甘い汁
 広助
- 2 自衛隊 国境越えて 軍隊に
 広助
- 2 核禁止 核の傘さし 原爆忌
 広助
- 3 戦さして 島をもどせと 辞職せず
 宏
- 3 もうすでにタガの外れた政治樽
 亀公子
- 3 地位協定 国内法無視 銃持たす
 宏

3	一強に勝つ作戦はただ一つ	立東爺
3	プラごみに病んでも竜宮死の平和	亀公子
3	ウソつきが北と会うねとまたウソを	一角
3	新元号なにをはしゃいでおりますか	ダン吉
3	原発の 破綻明白 コスト高	宏
3	令和令和戦前みたいなバカ騒ぎ	徹乗
3	一生を非正規で終えクビが来る	一角
3	十連休 農政批判 田植えする	広助
4	九条の刺殺をねらうテロリズム	林
4	増税と爆買いでGDPを上げました	大峰
4	酒飲んで戦争やれば日本消え	一角
4	改憲へ与党ガラスの大合唱	亀公子
4	国保料 酷保にさせる アベ与党	宏
4	遙か先走る彬を今も追う	ダン吉
4	トランプを「菊と空母」でオモテナシ	宏
4	訳あって廃棄しました領収書	立東爺
5	天皇の先祖もやはり猿だった	徹乗
5	無条件対話北とできて沖繩とは	白眞弓

自選句

◆自選句 中野林

5	改憲を生きがいにする木偶の坊	林
5	天皇報道知らず知らずにする洗脳	徹乗
6	ふざけるな九条の下武器見本	白眞弓
6	羽毛より軽い言葉で戦争論	徹乗
6	電話詐欺安倍と同じ事を云い	大峰
6	議事堂にドンと居座れ九条君	白眞弓
6	皇室を政権維持のダシにする	林
8	付度がいつか生み出すヒットラー	白眞弓
	閣議にて「現人神」を担ぎ出す	
	改憲を掲げて駆け出す令和かな	
	悪政にフタして令和幕を開け	
	神事をば国事行為にする違憲	
	改憲の音頭空しく響くだけ	
	日本は365日九条の日	

◆自選句 前田大峰

サンゴ移植汚泥漬けにして埋める
丸山議員九条も戦さも知りません
寄り添ってそつと懐に手を入れる
九条を死文化に歯止めはずす自衛隊
今死んだらまずい胃袋が空つぽだ

◆自選句 中野林

閣議にて「現人神」を担ぎ出す
改憲を掲げて駆け出す令和かな
悪政にフタして令和幕を開け
神事をば国事行為にする違憲
改憲の音頭空しく響くだけ
日本は365日九条の日

おたより

◆おたより 岩佐ダン吉さんより（大阪）

演劇「鶴彬く暁を抱いて」が終幕。昨年の12月

とこの5月、4日間で6ステージ。劇団きづがわの「鶴彬く暁を抱いて」の公演は1400人が観劇。「川柳で反戦平和をー川柳界にすごい人がいた」「鶴彬の川柳は今生きている。鶴彬を顕彰する会が今も活躍しているのは凄い」…嬉しい感想が届いています。さてこの財産を大きく発展していかねば……。

◆おたより 石上元旦さんより（川口市）

若葉の輝く美しい季節を迎えました。

さて、このたびは貴会の和川柳に父が創刊した「人民川柳」を紹介していただき有難うございました。「人民川柳」の表紙を見ながら亡き父のことをなつかしく思い出し、令和の時代にも父が生きていたなら果たしてどの様な川柳を作っただろうとかと思いを馳せました。

小池蛇太郎氏のことについては私の知る限り石上太郎ではありませんが面識はあったと思います。

季節も暖かくなり薫風吹く時候の中、渡辺様をは

じめ和川柳会の皆様のご健勝を心から記念申し上げます。

同封のものご自由にお使い下さい。別便にて埼玉銘菓をお送りしましたので、どうぞご賞味下さい。

◆東京の鶴彬顕彰碑に手取川の石を！

5月19日の「反戦川柳句集」出版記念シンポジウム（東京）に手紙を託しました。要旨を紹介（前

◆ほのぼの川柳 《投句歓迎》

不可思議は人との出会い縁である	神田鯛
縁がある仕事に出会いありがたや	神田鯛
子らの笑み思い砂場の草を引く	オニどん
入所させ親切すぎて足が萎え	ひろ
老人ホーム子どもの元気がいい薬	ひろ
幼稚園併設老人ホームあればなあ	ひろ

田大峰、周立東爺の連名で。

「反戦川柳句集」出版記念シンポジウムのみなさまへ

金沢市郊外「卯辰山」に1965年に鶴彬句碑「暁を抱いて闇にみる蕾」を故・岡田一杜の呼びかけで建立。東京でも10年前から建設が呼びかけられ、今の時代だからこそ鶴彬最期の地、東京に完成させたい。当時の関係者で一人残った私（前田大峰）は大変期待しています。日程と場所を決めて一気に動かしましょう。記念碑のメインとなる巨石の調達について、以下の様に提案させて下さい。

500年前、北陸一帯で「百姓の持ちたる国」という加賀一向一揆が100年間自治を行ってきました。この一揆の終焉の地、旧鳥越村を流れる手取川の石を鶴彬の句碑に提供したい。検討いただき、東京での建設運動の加速をお願いしたいと思います。

和川柳社同人 前田大峰 周立東爺

★後日連絡あり。早速動き出すそうです。（周）

連作

◆北海道・東北を走る 周立東爺

津軽海峡夕靄にフェリー包み込む

五稜郭生命が消えて世が変わる

明治維新食えぬ民あり蝦夷の地へ

移住先アイヌコタンの番外地

開拓で白老番外地に生きる

母の縁捜して遠くに来たもんだ

道延々火山荒野芽吹の候

手がかりを見つけた岩手の気仙郡

東北へフェリー捜してUターン

八戸はちのへに着き恐山へひと走り

六ヶ所村立派で大きな情報館

情報館スタッフだけの静けさで

村過ぎて賽さいの河原に突き当たる

硫黄泉三途の川に流れこむ

六文銭渡して浄土に行くそくな



六ヶ所村近く。季節が北陸とは一カ月遅く、一面に菜の花。



盛岡・光照寺で鶴彬の墓参。通行人に尋ねても場所が判らない。「鶴彬案内地図」があればと思った。

ここが地の果て恐山。三途の川に参拝客も多い。



蝦夷富士・羊蹄山



連休を利用して北海道行きを計画。函館の知人から「渋滞で移動は無理。連休が終わってから来て」の意見で、半月遅らせて車で出発。フェリーも利用し北海道へ。訳あって急遽東北に迂回して帰沢。走行距離2500kmの旅でした。札幌では同人の日下宏さんにお会いしました。歓迎多謝。青森の八戸では安藤昌益資料室、盛岡では鶴彬の墓参、石川啄木、宮沢賢治施設を訪問。(周)

プロレタリア文学運動の盲点 ⑦

反戦詩人・榎村浩

まきむら こう

周 立東爺

川柳関係者に鶴彬は「反戦川柳人」としての呼称が定着した感があるが、一般文学史やプロ文学運動史の中でもまだまだ知られておらず、プロ文学作家一覧に鶴彬の名をを捜すのは容易ではない。しかもプロ運動が描いた世界は高橋隆治が指摘したように、戦争を描いてはいなかった。

「日本のプロレタリア文学は、小作争議や労働争議をテーマにしたものがほとんどで、反軍・反戦を主題にした作品は意外なほど少数だし、ストレートに反戦に結びつくプロレタリア文学はこの時期にはもやはまったく影をひそめてしまっている。なぜなら、十五年戦争は『蟹工船』が売られていた昭和十五年よりも九年も前に開始されているからである。つまり反戦・

反軍を直接の主題とした小説が書かれるとしたら、もっと以前、プロレタリア文学最盛期の昭和四、五年でならなければ遅すぎたのである。」(戦時下文学の周辺』風媒社)

この指摘に刺激されて、「反戦と文学」を追いかけ、鶴彬と川柳作品を見極めようと始めた「プロレタリア文学運動の盲点」シリーズである。

今回、榎村浩を紹介したい。まさに文字通りの反戦詩人で、鶴彬より三歳若い彼の死は鶴彬と同じ年、一九三八年九月三日、拷問による「発狂」で脳病院に送られ死去。日本のファシズムはこの年の月、鶴彬と榎村浩という二人の天才詩人を殺したのである。

榎村浩 (まきむら こう)

1912年6月1日(1938年9月3日)

榎村浩は、本名・吉田豊道。高知県高知市生まれ。

3歳のとき、医学書をすらすら読むという神童

ぶりを發揮。高知市立第六小学校に転入。1922年、4年生【10歳】の時、『支那論』を書き、高知を訪問した久邇宮邦彦に「アレキサンダー大王」について進講したという。

【11歳】 私立土佐中学校2学年飛び級で本科に。

【16歳】 高知県立海南中学校に転校。

【17歳】 軍事教練の学科試験に白紙答案をだす軍事教練反対運動を組織。

【19歳】 関西中学校を卒業して高知に帰郷。日本プロレタリア作家同盟高知支部を結成する。このころ日本共産青年同盟に加盟。



楨村浩 まきむらこう

【20歳】 1932

年、2月創刊の『大衆の友』で、『生ける銃架』を発表する。共青高知地区委員会が高知市の歩兵44連隊兵

舎内に侵入して上海出兵に反対する「兵士よ敵をまちがえるな」と書いた反戦ビラを楨村が執筆。3月代表作『間島。パルチザンの歌』を発表。4月、治安維持法で検挙、拷問を受ける。未決1年、非転向で3年の刑となる。

【23歳】 1936年12月5日、「人民戦線事件」で

検挙、留置。翌37年【24歳】1月16日、重度精

神病で釈放、土佐脳病院に入院。翌1938年9

月3日、同病院で死去。【満26歳】

代表作は、『生ける銃架』『間島。パルチザンの歌』『詩

諷』など。楨村は朝鮮人民との連帯、植民地解放を

訴え、日本兵士に中国軍兵士と共同して日本軍への

反乱を呼びかけるなど、当時のプロレタリア文学に

おいても例のない国際連帯の視点に貫かれている。

鶴彬と類似の感性に溢れた青年であった。次頁に紹

介する「間島。パルチザンの歌」は1919年3月1

日朝鮮半島で起きた独立運動を描いている。日本軍

の弾圧で数千人の犠牲者を出した事件である。



楨村の詩碑、『間島パルチザンの歌』を刻む。
高知市の城西公園、旧刑務所跡。

間島パルチザンの歌

楨村浩

思ひ出はおれを故郷へ運ぶ
白頭の嶺を越え、落葉松の林を越え
蘆の根の黒く凍る沼のかなた
緒ちやけた地肌^{こつらいきじ}に黝^{くろ}ずんだ小舎の続
くところ
高麗雉子^{こうらいきじ}が谷に啼く威鏡の村よ

雪溶けの小径を踏んで

チゲを負ひ、枯葉を集めに

姉と登った裏山の楢林よ

山番に追はれて石ころ道を駆け下り

るふたりの肩に

背負繩はいかにきびしく食ひ入ったか

ひゞわれたふたりの足に

吹く風はいかに血ごりを凍らせたか

雲は南にちぎれ

熱風は田のくろに流れる

山から山に雨乞ひに行く村びとの中に

父のかついだ鍬先を凝視^{みつ}めながら

眼暈ひのする空き腹をこらへて

姉と手をつないで越えて行った

あの長い坂路よ

えぞ柳の煙る書堂の陰に

胸を病み、都から帰ってきたわかものゝ

話は

少年のおれたちにどんなに楽しかったか

わかものは熱するとすぐ咳をした

はげしく咳き入りながら

彼はツアールの暗いロシアを語った

クレムリンに燻ぶった爆弾と

ネヴァ河の霧に流れた血しぶきと

雪を踏んでシベリヤに行く囚人の群と

そして十月の朝早く

津波のやうに街に雪崩れた民衆のど

よめきを

ツアールの黒鷲が引き裂かれ

モスコーの空高く鎌と槌の赤旗が

翻ったその日のことを

話し止んで口笛を吹く彼の横顔には

痛々しい紅潮が流れ

血が縞衣の袖を真赤に染めた

崔先生と呼ばれたそのわかものは

あのすざましいどよめきが朝鮮を揺るがした春も見ずに

灰色の雪空に希望を投げて故郷の書堂に逝った

だが、自由の国ロシアの話は

いかに深いあこがれと共に、おれの

胸に沁み入ったか

おれは北の空に響く素晴らしい建設

の轍の音を聞き

故国を持たぬおれたちの暗い殖民地

の生活を思った

おゝ

蔑すまれ、不具にまで傷づけられた

民族の誇りと

声なき無数の苦悩を載せる故国の土地！

そのお前の土を

飢えたお前の子らが

若い屈辱と忿懣をこめて嚙み下すとき――

お前の暖い胸から無理強ひにもぎ取

られたお前の子らが

うなだれ、押し黙って国境を越えて

行くとき――

お前の土のどん底から

二千萬の民衆を揺り動かす激憤の熔

岩を思へ！

おゝ三月一日！

民族の血潮が胸を搏つおれたちのど

のひとりか

無限の憎悪を一瞬にたゞきつけたお

れたちのどのひとりか

一九一九年三月一日を忘れようぞ！

その日

「大韓独立萬歳！」の声は全土をゆ

るがし

踏み躪られた日章旗に代へて

母国の旗は家々の戸ごとに翻った

胸に迫る熱い涙をもっておれはその

日を思ひ出す！

反抗のどよめきは故郷の村にまで伝はり

自由の歌は威鏡の嶺々に飡した

おゝ、山から山、谷から谷に溢れ出

た虐げられたものらの無数の列よ！

先頭に旗をかざして進む若者と

胸一ぱいに萬歳をはるかの屋根に呼

び交はす老人と

眼に涙を浮かべて古い民衆の謡をう

たふ女らと

草の根を噛みながら、腹の底からの

嬉しさに歓呼の声を振りしぼる少年

たち！

緒土の崩れる峠の上で

声を洩らして父母と姉弟が叫びながら、こみ上げてくる熱いものに我知らず流した涙を

おれは決して忘れない！

おゝ、

おれたちの自由の歓びはあまりにも

短かゝった！

夕暮おれは地平の涯に

煙を揚げて突き進んでくる黒い塊を見た

悪魔のやうに炬火を投げ、村々を焰

の海に浸しながら、喊声をあげて突

貫する日本騎馬隊を！

だが焼け崩れる部落の家々も

丘から丘に搾裂する銃弾の音も、お

れたちにとって何であらう

おれたちは咸鏡の男と女

搾取者への反抗に歴史を綴ったこの

故郷の名にかけて

全韓に狼煙を揚げたいくたびかの蜂

起に血を滴らせたこの故郷の土にか

けて

首うなだれ、おめくくと陣地を敵

に渡せようか

旗を捲き、地に伏す者は誰だ？

部署を捨て、敵の鉄蹄に故郷を委せ

ようとするのはどいつだ？

よし、焰がおれたちを包まうと

よし、銃剣を構へた騎馬隊が野獣の

やうにおれたちに襲ひ掛からうと

おれたちは高く頭を挙げ

昂然と胸を張って

怒濤のやうに嶺をゆるがす萬歳を叫

ばう！

おれたちが陣地を棄てず、おれたち

の歓声が響くところ

「暴庄の電光を覆ふ」朝鮮の片隅に

おれたちの故国は生き

おれたちの民族の血は脈々と搏つ！

おれたちは咸鏡の男と女！

おう血の三月！——その日を限り

として

父母と姉におれは永久に訣れた

砲弾に崩れた砂の中に見失った三人

の姿を

白衣を血に染めて野に倒れた村びと

の間に

紅松へ逆さに掛った屍の間に

銃剣と騎馬隊に隠れながら

夜も昼もおれは探し歩いた

(以下に続く90行は略)

シベリア抑留の記録

⑧

「在ソ三年 生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

前回までのあらすじ

民主グループが出来て政治将校の威をかるのが出てきた。昭和二十二年春になった。空腹のため炊事係は誰もが望む。マリタの演習場は推定四十キロ平方での作業が続く。ソ連の警備兵に媚びをうる連中が高圧的で暴力を振るう。日常茶飯事であった。

第六章 紛失した水準器

マリタ演習場での作業を終えたわれわれは六月頃イルクツク市北西郊外の収容所に入り、建築や土工作業とかわり炊事係も全部若い兵隊と交替した。私は器材係ということで一人収容所の柵外百米余りの処に在るバラック造りで三坪程の器材庫に寝起きし

ていて毎朝作業に出て来る人員に応じあらかじめ示されたつるはしシャベル鋸斧などを責任者に渡し、夕方これを受領する出納係で衰弱した体にはうってつけの仕事である。私は日没を待つて必らず点呼代わりに顔を出すソ連兵の確認が済むと頃合いを見計らって毎夜のように小屋を脱出し近くの畑に行つて馬鈴薯を盗つて来ては喰べ時々収容所内の旧分隊員にも分け与えるという自由な生活を続けていた。

ところが或る日、器材庫に在つた旧式な水準器一個が紛失しているのを発見し私は一度に体じゅうが凍る恐怖にとらわれた。

「発覚すればチヨルマ（監獄）だ！」

思つただけで心細く、かと云つて他に思案もなく一週間余り夜も眠れなかつたが神仏を心に念じあれこれ考へた末、ある夜、私の一番親しくしていたクワレンカというソ連兵に思いきつて話した処、彼も驚き二人で念入りに捜したがない。「ヒートリ（泥棒）にあつたのだ」と彼は云う。私が食事の受領や用事

で小屋を空けることは一日に何回もある。その間を狙ってやられたらしいことは当然考えられるけれども、今となつては打つ手段はない。

重苦しい空想の中で又一週間ほど経つたある夜の九時頃突然訪れたクワレンカに案内された私は市の東北郊外で作業していた日本の現役部隊に行き、係の若い軍曹から半分こわれかかった員数外の水準器を貰い受けることが出来た。後で聞いたところでは、これは凡てクワレンカが八方手を尽くしてくれたお陰で、一時は途方にくれた私が往復二十キロ位もあつた夜の道程も必死の思いの私には遠いとは思われなかつた。

この部隊は昭和二十年十月に入ソ以来ずっと同じ部隊編成で服装も旧軍服で給与も良いらしく、活気に溢れ係の下士官の露語の堪能さに一驚し労働大隊とは異なつた捕虜の素顔を見たように思った。とにかくこの事件は私にとっては忘れられない

九死に一生といった思い出である。

第七章 再びマリタの山へ

一九四八年（昭和二十三年）一月二日内地ならまだ正月というのにわれわれに又も移動命令が来て、極寒についてマリタ駅まで行つたが、この時、入ソ以来はじめてシベリヤ鉄道の普通列車に乗車した。切付を持たない者は日本人だけでなく誰でも車内には入れない。ソ連人とデッキに混乗だが日本のように外国人だからとじろじろ見られることがないから気が楽である。唯機関車の外側にまで四、五人の人が乗っているのには驚かされたが怪我をしても鉄道に責任はないといつたところだろうか。

マリタに下車したわれわれは駅前に待っていた四輛の軍用トラックに分乗、演習場を横切つてどんだん山の中に入つて行つた。どちらを見てもシベリヤ赤松や白樺ばかりの林道を西方に向かつて走ること一時間余りにして山あいの平坦地に下車

した。此処には以前何処かの日本人捕虜が二個中隊位幕舎生活をしていたらしく、撤収した幕舎跡に散乱した缶詰の空き缶や紙屑などから現役部隊であることが一目で判った。

近くに半地下式の倉庫らしいものが大小各一棟あるだけで人家一つない山の中である。西方百米余りの所が八十米程度の南北に連なった大地となり、それから先は山又山が続き、この台地は北に進むにつれて峻険しゅんけんとなり山峡は相当深いらしい。然し見渡した附近一带は既に先の捕虜部隊が伐採したあとらしく立木はなく開闊地かいかつちとなっていた。

倉庫附近はなだらかな南に向かった傾斜、その先は湿地帯で湿地の外れに数戸の民家があるというが此処からは見えず一条の細い道がついており時折り遠い処から狼の鳴き声が聞こえる外は小鳥の声さえ聞こえない静けさである。 sono

警備のソ連兵は雪の上に野戦釜三個と糧秣りょうまつを放り出したまま「明後日より伐採」というが、これ

は日本人の器用さというものを彼等がよく知っているからであって「窮すれば通ず」の言葉通り何時如何なる処に連行されても一カ月もすれば日常生活に事欠かないようになり、下駄、麻雀、将棋から娯楽用に太鼓から三味線、時代劇用のかつらまで作ってソ連人を驚かしたこともあった。

其の外、例へば動物の骨を切断して見ると真ん中の穴の内部にはバターかチーズのような色をした半固形の脂肪があることを知ったわれわれは機会ある毎に監視兵の眼を盗んではソ連民間人の塵捨場を漁り彼等がスープの出汁殻として捨てた骨を拾い集めた。この骨を斧で砕いて飯盒に入れ水を加へて根気よく炊くとやがて骨の中の脂肪は熱により溶けて浮上する。これを三時間乃至四時間余り外気にさらして置くと可成りの固形脂肪が得られ、これを黒パンと一緒に喰べたり、灯油代わりに使った。

(次回に続く)

編集後記を兼ねて

◆衝撃的な事件でした。川崎市の殺傷事件。加害者についての報道に抜けていることがある。両親に捨てられた少年の悲しみと怒り、成長のゆがみ等々である。世の幼子を持つ親たちへの警鐘をならすべきである。◆またこれも大きなニュース。国際機関から「世界競争力ランキング」が発表され、日本は順位を下げ30位となった。「豊かな日本」はどこにもない。格差、少子化が止まらない。他人を

思いやる余裕もない世に変わった。◆7頁は筆者のルーツ探して北海道から岩手への旅情報。八戸では安藤昌益、盛岡では啄木、賢治に寄った。◆東京鶴彬顕彰会が顕彰碑建立に動くようだ。句を刻む石を贈呈しようと考えています(6頁)。◆鶴彬の命日に向けて今年も顕彰会がいろいろ企画しています。予定になかった高松の小学校で盛岡の元校長先生・宇部功さんの特別授業が急遽決まりました。6月28日(金)。◆今年も鶴彬の熱い情報を載せていきます。

6月例会のご案内(毎月第4木曜に変更!)

◆例会 6月27日(木) ◆投稿×切:23日(日)

◆課題「石」 3句以内 ◆自由吟:5句以内

◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見なども

お願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。

◆句報を持参下さい。例会で話し合います。

●投稿 FAX(076) 254-0762

●メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

「和川柳社」会報
会員募集しています!

同人:4000円/年

投句/購読:2000円/年

★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和川柳社 〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30 (渡辺 寛)

電話 FAX:076-254-0762 PC-mail:kananabe@popolo.org

携帯:090-9445-1302 携帯 mail:kan-wata@i.softbank.jp

振込先:北國銀行中央市場支店 #191 普通 640 「和川柳社」